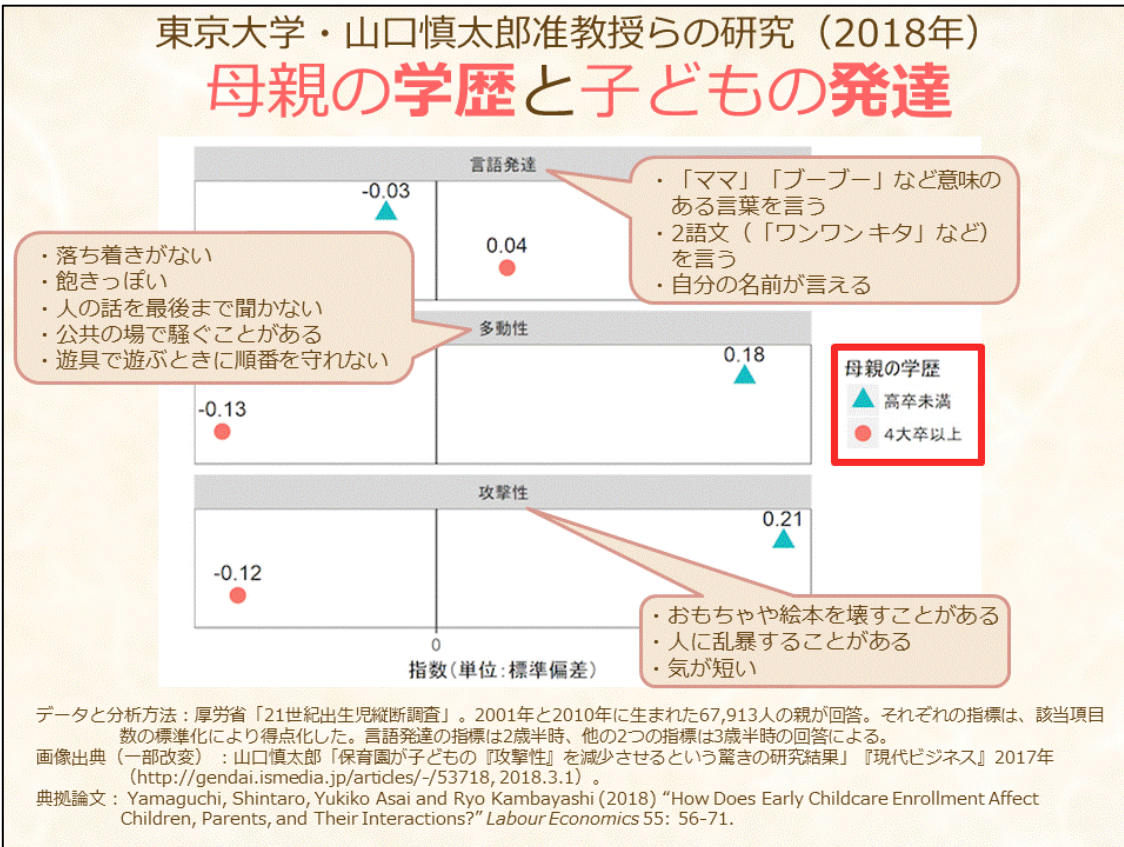
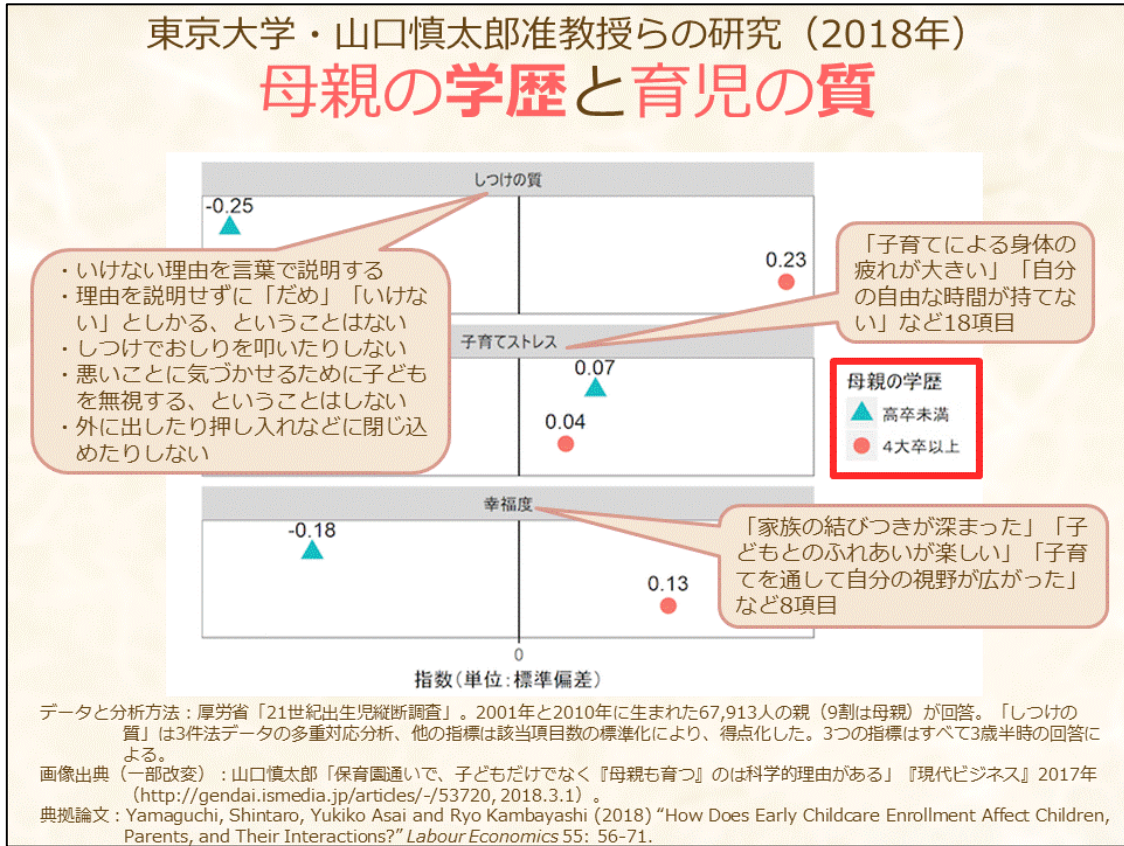


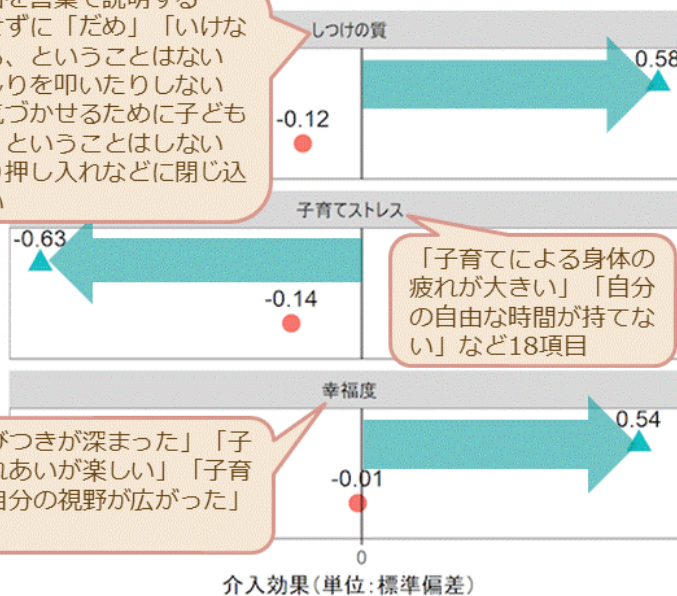
- ④ 高卒未満の学歴の母親は、子どもが2歳半時に保育所に通っていると、子育てストレスが減り、育児幸福度が高まり、しつけの質が上がる。同時に子どもも、3歳半までに、言語発達が良好になり、攻撃性が減る⁷。



⁷ Yamaguchi, Shintaro, Yukiko Asai and Ryo Kambayashi, 2018, "How Does Early Childcare Enrollment Affect Children, Parents, and Their Interactions?" *Labour Economics* 55: 56-71.

東京大学・山口慎太郎准教授らの研究（2018年） 2歳半での保育所通いの効果（親）

- ・いけない理由を言葉で説明する
- ・理由を説明せずに「だめ」「いけない」としかる、ということはない
- ・しつけでおしりを叩いたりしない
- ・悪いことに気づかせるために子どもを無視する、ということはない
- ・外に出したり押し入れなどに閉じ込めたりしない



母親の学歴

- ▲ 高卒未満
- 4大卒以上

「子育てによる身体の疲れが大きい」「自分の自由な時間が持てない」など18項目

「家族の結びつきが深まった」「子どもとのふれあいが楽しい」「子育てを通して自分の視野が広がった」など8項目

介入効果(単位:標準偏差)

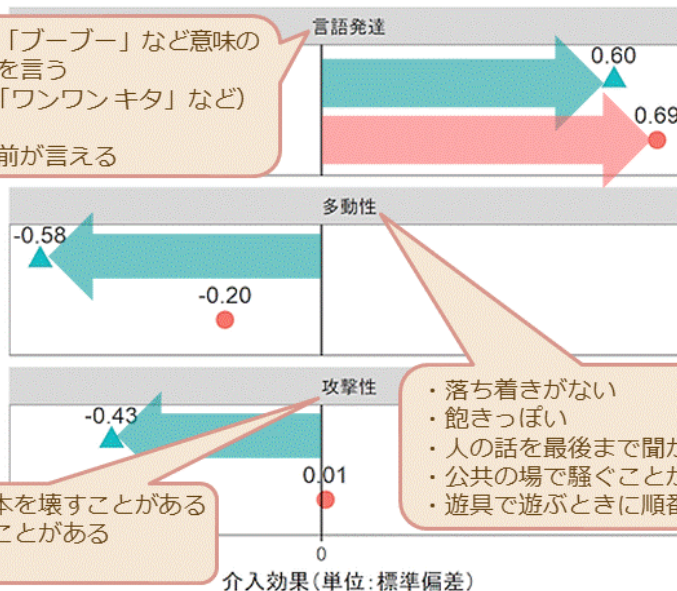
データと分析方法：厚労省「21世紀出生児縦断調査」。2001年と2010年に生まれた67,913人の親（9割は母親）が回答。差の差法と操作変数法による因果推論（矢印は5%水準で有意）。「しつけの質」は3件法データの多重対応分析、他の指標は該当項目数の標準化により、得点化した。3つの指標はすべて3歳半時の回答による。

画像出典（一部改変）：山口慎太郎「保育園通いで、子どもだけでなく『母親も育つ』のは科学的理由がある」『現代ビジネス』2017年（<http://gendai.ismedia.jp/artides/-/53720>, 2018.3.1）。

典拠論文：Yamaguchi, Shintaro, Yukiko Asai and Ryo Kambayashi (2018) "How Does Early Childcare Enrollment Affect Children, Parents, and Their Interactions?" *Labour Economics* 55: 56-71.

東京大学・山口慎太郎准教授らの研究（2018年） 2歳半での保育所通いの効果（子ども）

- ・「ママ」「ブーブー」など意味のある言葉を使う
- ・2語文（「ワンワンキタ」など）を使う
- ・自分の名前が言える



母親の学歴

- ▲ 高卒未満
- 4大卒以上

- ・落ち着きがない
- ・飽きっぽい
- ・人の話を最後まで聞かない
- ・公共の場で騒ぐことがある
- ・遊具で遊ぶときに順番を守れない

- ・おもちゃや絵本を壊すことがある
- ・人に乱暴することがある
- ・気が短い

介入効果(単位:標準偏差)

データと分析方法：厚労省「21世紀出生児縦断調査」。2001年と2010年に生まれた67,913人の親が回答。差の差法と操作変数法による因果推論（矢印は5%水準で有意）。それぞれの指標は、該当項目数の標準化により得点化した。言語発達の指標は2歳半時、他の2つの指標は3歳半時の回答による。

画像出典（一部改変）：山口慎太郎「保育園が子どもの『攻撃性』を減少させるという驚きの研究結果」『現代ビジネス』2017年（<http://gendai.ismedia.jp/artides/-/53718>, 2018.3.1）。

典拠論文：Yamaguchi, Shintaro, Yukiko Asai and Ryo Kambayashi (2018) "How Does Early Childcare Enrollment Affect Children, Parents, and Their Interactions?" *Labour Economics* 55: 56-71.

2. 子どもの幸せ

- ⑤ 15歳までに親から「身体的暴力」や「ネグレクト」を受けると、
- ・将来の「社会的サポート」が減ったり（経路のうちの2～3割）、
 - ・将来の「社会的地位」が下がったり（経路のうちの1～0割）、
 - ・それ以外の直接・間接の経路（経路のうちの7～8割）によって、「幸せでない」と感じる確率が8.4%高くなり⁸、「抑うつ状態」になるリスクは2～3倍になり、「自殺念慮」のリスクは6倍ほどになる⁹。

※ ただし、どのようなメカニズムで虐待が社会的サポートの減少につながるのかは、明らかではない（→下記の②の研究対象）。

- ⑥ 15歳までに親から「身体的暴力」を受けると、将来の抑うつや孤立につながり、「ネグレクト」を受けると、抑うつを介さずに、将来の孤立につながる¹⁰。

後者のネグレクトの影響は、「他者との間の愛着形成が困難になり、たとえ意欲や関心があっても（つまり抑うつ状態でなくとも）、他者に頼ることができなくなる」という可能性を示唆する。

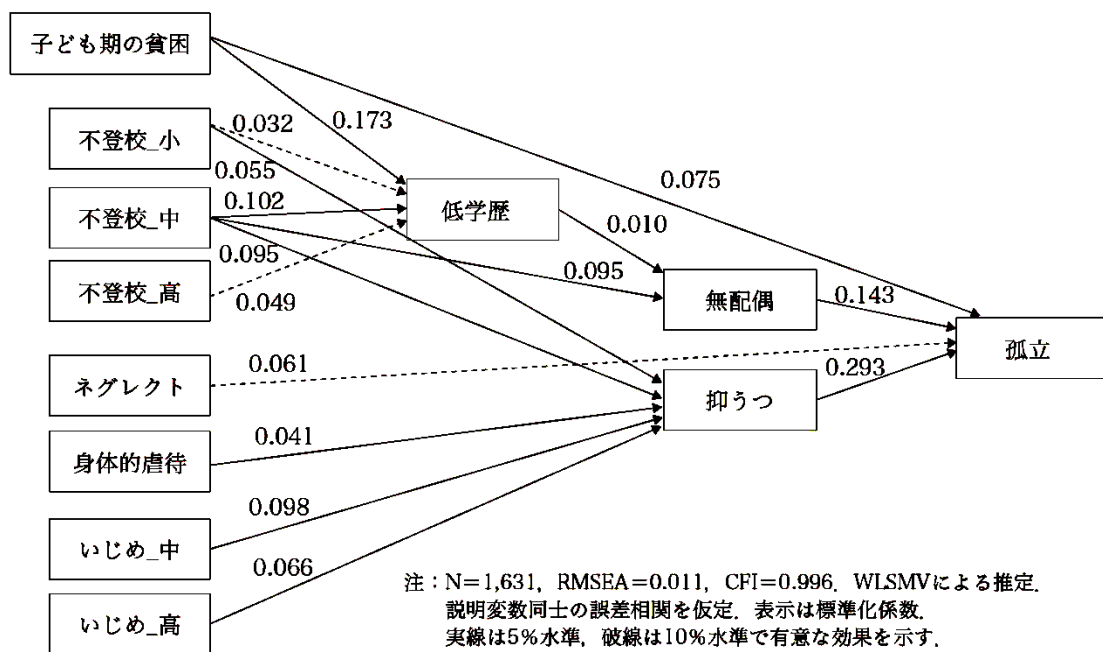


図2 子ども期の不利から孤立へのパス図

- ⑦ （柴田の現在の研究）「保育所通園経験が将来の幸福感などに与える長期効果」の分析
→ 提出資料（3）

⁸ Takashi Oshio, Maki Umeda, and Norito Kawakami, 2013, "Childhood adversity and adulthood subjective well-being: Evidence from Japan," *Journal of Happiness Studies* 14(3): 843-860.

⁹ Takashi Oshio, Maki Umeda, and Norito Kawakami, 2013, "The impact of interpersonal childhood adversity on adult mental health: How much is mediated by social support and socioeconomic status in Japan?" *Public Health* 127(8): 754-760.

¹⁰ 三谷はるよ、2019、「社会的孤立に対する子ども期の不利の影響——「不利の累積仮説」の検証」『福祉社会学研究』16: 179-199。